

## スミス女子大学を訪れて

横田啓子



写真提供スミス大学

今年ミルズ女子大での出来事を機に女子大が大きな関心を集めた。「ミルズが女子大でなくなれば大学を辞める」とストライキをしている女子学生の姿に、かつて津田塾大学で楽しくて開放的な日々を過ごし、初めて男子に邪魔されず立派な教育を受けたと感謝する自分を重ね合わせずにはおれなかった。しかし、日本と比べて男女平等の考え方がもっと社会にゆきわたり、様々な分野で女性が活躍しているアメリカで、まだ女子大は本当に必要なのだろうか。多くの女子大が共学化している中で未だに女子大であり続ける東部の名門校スミス大学に私は大いに興味を抱き、8月の半ば、まだ夏休みで閑散としているキャンパスを訪れた。

深い緑の木々の間にニューイングランド特有の赤いレンガの古い上品な建物が見え隠れする。りすが小走りに木を駆け上って行く。せみしぐれの合間に、休み中に建物の整備をする職員の話し声が聞こえてくるだけなのに、背筋を伸ばして歩きたくするような緊張感が漂っている。最初に大学の中心部にあるネルソン図書館を訪れることにした。ここには創立者ソフィア・スミスの肖像画がある。ソフィア・スミスは飾り気がなく気品があり、その威厳に満ちた深いまなざしに私は清ひつな緊張を感じた。

### スミス大学の歴史

スミス大学は、ソフィア・スミスの女子のための高等教育への信念と遺贈により、1871年にマサチューセッツ州に創立され、1875年の秋に、男性学長のもとで、6人の教授と14人の学生によって開校した。男子校として開校したアイビーリーグ8校と対比させてセブンシスターズと呼ばれる東部の名門女子校の1つである。ソフィア・スミスは、女子への高等教育とキリスト教教育を通じて「不正義を正し、賃金を是正し、社会の悪を改革するように貢献し、教師として、作家として、母として、社会の一員としての女性の善への力を無限に伸ばしていくよう教育すること」を目指した。約120年にわたるその歴史で、スミス大の宗教的使命は世俗化した。人間の尊厳と女子の権利への関心は教育理念として継承されている。

開校当初から、授業科目には人文科学だけでなく、自然科学、社会科学も含まれていた。1917年には、社会福祉学大学院が設置された。1924年には、海外留学プログラムが始められ、国際社会で活躍できる女性の育成が目標となった。私は、そこにスミスの先見性のある大学経営方針を感じた。卒業生には、女性運動のベティ・フリーダンなどの指導的地位にある女性や、バーバラ・ブッシュ大統領夫人などの各界リーダーの夫人を多く輩出している。

1960年代には、公民権運動、学生運動、対抗文化運動（ヒッピー等）、女性運動の影響がスミスのキャンパスにも及び、独立心と野心のある学生が増加し、カリキュラムの大幅な改革が行われた。その1つとして、この大学は、近隣のハンプシャー大、アムハースト大、マウントホリヨーク女子大、マサチューセッツ州立大との間に五大学協定を結び、これらの大学での単位取得が可能になった。これは、少人数の教養関連学科中心のカレッジの良さを残しながら、学生の知的交流と研究範囲を広げることを目的とした斬新的プログラムであり、小規模大学の存命経営術でもあると言えよう。

1960、70年代に入ると、教育の男女平等が検討され、名門女子大バツサーが

男子の入学を認め、一方、ハーバード、イエール、プリンストン、ダートマス、コロンビア等のアイビーリーグ男子校は女子の入学を認めた。このような社会変化を受けて、スミスでも71年に共学化が検討されたが、創立者の意思に反するものとして、理事会、教授会、経営担当者、学生、同窓会の強い反対で共学案は退けられた。

女性運動の影響は、スミス大学の多方面の生活にも現れ、75年には、スミスの卒業生であり、女子教育におけるカリスマ的リーダーといわれたジル・コンウェイ (Jill Ker Conway) が初めての女性学長として就任した。コンウェイ学長の指導のもとに、学生年齢を過ぎた女性の再入学と学位取得のためのプログラムの導入、キャリア開発センターの拡充、フィットネス・プログラムの充実、体育館の建設等が行われた。

80年代にも学生の政治意識は高く、南アフリカ共和国のアパルトヘイト反対運動がキャンパスで繰り広げられた。84年に、大学側は学生の要求を受けて、大学としてアパルトヘイト反対を公に表明するために、南アフリカ政府発行の国債への投資を中止すると共に、毎年南アの黒人女性2名に奨学金を与えてスミスに留学生として迎え将来の女性リーダーとして教育するプログラムを創設した。この制度による初めての奨学金生が89年に卒業した。私がインタビューした、学内10のオフィスの連絡総括を担当するエレノア・スミス部長は、このプログラムが学生の人種差別反対運動から生まれたものであること、そしてスミスが今特に力を入れているものであることを強調した。彼女自身、南アに出張して、この制度のことを広めるために各地を訪れ講演したそうだ。

85年には、同じくセブンシスターズの一員であるプリンマー大からメアリー・ダン (Mary Maple Dunn) を学長として迎え、変化の激しい世界と時代に生きる女性の新しい知的要求に対応する授業科目が設置された。例えば、コンピューター科学、女性学、第三世界の発展、脳科学、映画学、ラテンアメリカ研究、東アジア研究（日本語も含まれる）等である。

### 現在のスミス大学

89年度における学生数は、国内および海外50カ国からの留学生を含む約3,000人（日本人9人）であり、そのうち、学生年齢を超えた社会人の再入学生は315人となっている。入学には学力テストと推薦状の他、面接が義務づけられており、学力、人格両面からの選考が行われる。

人種別には90年卒業生の83%がアメリカ人白人で、非白人および留学生が17%となっている。10年前にはその割合は91%対9%であったから、後者グループの割合は増加してきた。これは主にアジア系アメリカ人(1.6%から7.4%に増加)および留学生(2.3%から6.3%に増加)の増加によるものであり、アフリカ系アメリカ人は逆に減少した(4.5%から2.7%に減少)。スペイン語系アメリカ人はほぼ1%を維持しているが、インディアンは1人もいない。アフリカ系が減少し、アジア系が増加したのは、80年代から90年代にかけての全国的現象である。アジア系の増加は、アジア系の家族がすでに経済的に中産階級以上に成功していること、家族の移民前の学歴が比較的高いこと、教育熱心な価値観を持っていること、肌が黒くないためアフリカ系ほど人種差別を受けないこと、などの理由のためである。

スミス氏は、自身がアフリカ系アメリカ女性であるが、「マイノリティーという言葉は使いたくない」と語った。「マイノリティー」というと、「少なくとも重要でないグループ」というイメージが強くなってしまふからだとする。「21世紀には、アメリカの人口比率は有色人種が多数派になり、マイノリティーではなくなる。今このマイノリティーと呼ばれるグループの教育に投資し、人材を育てなければ、アメリカはこれから大変深刻な問題を抱えることになる。スミスの教育もこの現状に対応しようとしているのだ」と口調に力がこもった。

アフリカ系アメリカ人という言葉は長年使用されてはいたが、1988年大統領選挙の時に黒人候補者ジェシー・ジャクソンが、キャンペーン中に意識的に政治的意味をこめて使い出したのを受けて、従来の「黒人」の代わりに用いられるようになってきた。アフリカ系アメリカ人という時、ドイツ系、アジア系等と同様に、自らの人種民族の伝統、ルーツを明確にしようとする意図がある。またアメリカの「黒人」は肌の色が黒ではなく、濃い褐色からほとんど白人に近い黄色まで幅があることも、黒人ではなく「アフリカ系アメリカ人」という表現を使う理由の1つである。

宗教的に見ると、かつてプロテスタントの信仰のもとに創立された大学ではあるが、現在は、カトリック系の学生も多く、ユダヤ教、イスラム教、仏教の学生もおり、宗教の自由が保障されている。キャンパスには、カトリックとユダヤ教の礼拝室が設けられ、それぞれに宗教アドバイザーがいるのは、憲法で信教の自由が保障、尊重され、多人種、多宗教の混合体であるアメリカの大学ならではの事だろう。

学生の専攻分野を90年卒業生の統計によって見ると、社会科学系(行政学、

経済学、社会学、人類学、都市研究等)が全体の43%を占めており、その次に人文系(文学、哲学、宗教、教育等)が26%、芸術系(舞踏、演劇、音楽)が17%、自然科学系(物理、生命科学、コンピューター、数学、宇宙工学等)は14%となっている。

参考までに、スミスの学科を専攻学生数の多い順に列記する。行政、経済、心理、芸術(芸術史、美術、建築と都市工学)、英語、生物科学、歴史、数学、アメリカ学、演劇、社会学、フランス(言語、文学、フランス学)、比較文学、人類学、コンピューター、音楽、哲学、宗教学、教育、生化学、スペイン・ポルトガル(言語、文学、ラテンアメリカ研究)、地学、ドイツ語、イタリア語、女性学、物理、ロシア(言語、文化、文学)、アフロアメリカ研究、化学、東アジア研究、古典、宇宙工学、中世研究、ダンス、古代研究。

卒業生の就職状況は専門職に集中している。70年、80年、90年の卒業生の就職先トップ3を比較すると、それぞれの時代に高学歴女性に開かれていた職業状況と共に、女性達の職業指向および社会的要請の変化の動向がうかがわれ、興味深い。70年では、弁護士、大学研究者、医者という、いわゆる高学歴女性のための専門職が多かったが、80年には、女性の伝統的専門職以外の分野への進出が進み、一般企業、金融業界の就業が増加した。80年代には、男女共に高学歴者は「ヤッピー」と呼ばれる高収入の専門職(弁護士、金融業、経営)に多く流れたが、スミスの卒業生もこのような流れを追った。そして90年の卒業生になると、法律関連事務・調査、幼稚園・小中高等学校の教師、企業(経営、販売)がトップ3へと変わり、続いて銀行、医療関連、研究職が多い。教職への興味の高まりは、教職の給与などの雇用条件が改善されてきたこと、80年代後半からアメリカで高まった教育の質の低下への危機感から教職の重要性が再強調されるようになったこと、金中心の価値観から社会への貢献強調へと価値観が移行してきたことなどを反映しているのだろう。

教授における性構成は、男女半々に近付いており、女121人、男147人となっている。ただし、終身雇用(テニユア)の教授に限れば、女62人、男113人であり、まだアンバランスだ。有色人種の女性は現在は全教授の4%だが、増加に力を入れている、とスミス氏は語った。

## エレノア・スミス氏にインタビュー



ここで、私のインタビューの相手、エレノア・スミス氏を紹介したい。彼女は1972年にユニオン・インスティテュートで黒人女性史で博士号を取得し、15年間オハイオ州のシンシナティー大学のアフリカンアメリカン研究学科で主に黒人女性の研究を行い、また大学学長室の副室長、教授会の副会長として大学経営にも参加した。2年前にスミス大学に移り、学内の10のオフィスを統括し管理する部局の長を務めている、数少ない黒人女性管理職のパイオニア的存在である。

私が、スミス大に転職した理由を尋ねると、彼女は「この数年、女性研究に専心し、シンシナティー大ではアフリカ女性の研究をし、またアメリカ黒人女性史のコースも設立した。それから大学管理に関心を持ち始めて、女子大と共学校での女性の経験は本当に違うのかどうか確かめたいと考え、スミスで働くことに興味を覚えたからだ」という答えが返ってきた。

## 女性のリーダーシップを養成する女子大

— スミスに来てみて、実際に共学との違いを感じましたか？

「女子が率先してリーダーシップを取るという点で違う。女性差別が社会に存在する間は、女性が共学では得られない様々な経験を与えてくれる女子大を選択できる機会が必要だ。例えば、共学大学では男子学生がリーダーシップを握り、奨学金を授与される機会も多い。スポーツは男子支配だ。この傾向は変化してきてはいるものの、まだまだ男中心だ。学生自治会においてもリーダーは男子、学生新聞の編集者もスタッフもほとんど男子だ。それに対し、スミスのような女子大では、女子学生が男子に支配されることを憂慮しなくて良い。女子が自分達のエネルギーと能力を十分に発揮できる。これが大きな違いだ。」

— 私が日本語を教えているアムハースト大学は前は男子校だったが、76年に共学に編成された。当時は共学反対者も多く、その理由は、男子校では男同士の

友情を深め、女に邪魔されずに勉学に専心できるというものだった。共学推進者は教育の男女平等を唱え、結局共学になった。女子大の存在は男性差別ではないのでしょうか？

「今あなたが、男子校は男性間の友情を深め、女とかかわらないでよい、と言ったのはおもしろい。男子校の場合は、差別や教育の機会の剝奪は問題にならないのだ。しかし、女子大の存在意義について話す時は、社会一般における女性差別と教育の場における男支配を問題にする。男子校が共学化したのには、平等論もあったが財政問題もあった。他の多くの女子大が共学になっていったのは、財政上の理由だ。」

— 女性運動の成果で、現在女性には多くの機会が開かれてきたので、もう女子大は必要ないという意見もありますが、どう考えますか？

「確かに、過去に比べれば、さまざまな分野で女性の“機会”は増えたが、まだ“平等な機会”ではない。今でもいろいろな制限が多く残っているし、分野も限られている。女性は特定の役割を果たすように社会化され、特定の女性向きとされる仕事をする。このようなことが続く限り、女性の教育に対する特別の配慮が必要だ。例えば、女性を教育するのはどういう人か、その教育内容はどんなものか、男中心に偏っていないか、将来のための情報が女性に与えられているか、などだ。これまでほとんどの女子大の教授陣は主に男だった。学長も男だった。スミスでも、女の学長はやっと2代目だ。女子大の女性学長は、カリキュラム設定や教授の雇用に当たって非常に意義ある役割を果たしていると思う。」



写真提供スミス大学

— スミスでは、女子学生が非伝統的分野に進むように、どのような努力をしていますか？

「1,800万ドルを投じて作った新しいサイエンス・センターを見てください。科学と数学の分野には今でも女性は極めて少ない。現在、私達は人文科学や社会科学を充実させると共に、女子学生が科学の分野にもっと進出するように促し、成功するように特に力を入れている。」

— 数学を教えているナイジェリアの黒人女性を見かけましたが。

「これは、目標とできるモデル像を学生に与えるためのプログラムの1つだ。各分野で秀でた先輩の大学院生に奨学金を出し、学部生を指導してもらっている。特に数学、科学分野でのモデル、指導者としてのモデル像を持つことは大切だ。」

#### 就職サービスの充実、強力な同窓会ネットワーク

— 就職指導などのサービスはどうですか？

「スミスには非常に優れた就職サービスがある。共学校の女子学生が、ここと同じくらい質の高いサービスを受けられるかどうか、私は疑問に思う。キャリア開発センターは、学生のキャリア・プランニングを手伝うために講演会を促したり、履歴書や求職の手紙の書き方、面接の練習、そして学生の自信を育てるワークショップ等を開催している。それから、個人的なカウンセリングも行い、学生に想像する以上に多岐にわたる職業選択の可能性を示し、個々の学生に合うインターンシップや就職先を探す手伝いもしている。

私がスミスに来て非常に感動したことの1つは、同窓会の姉妹達のネットワークの強さと後輩姉妹への親切で熱心な援助だ。社会的に成功しているこれらの卒業生達はキャリア開発センターに登録していて、後輩姉妹達に仕事の情報を提供したり、就職の面接時やアパート探しの時に宿を提供したり、きめ細かい配慮をし、助け合っている。これは素晴らしいことだ。」

アメリカの企業、政府機関、美術館等いろいろな機関では、学生を夏休み中などに短期間雇用し、その機関の仕事内容を学ばせる制度がある。学生にとっては将来の職探しのための目安になり、実践的経験ができるし、また就職の際には、インターンの経験の有無と内容が大きな決定要因となるのでインターンシップ探しは重要である。

— スミスに入学する学生は、そういう恵まれたキャリアサービスを知って、女子大だからという理由で入学を希望するのでしょうか？

「多分、他の理由で入学を決定する学生の方が多いと思う。例えば、優れた教授陣の顔ぶれ、カリキュラム、図書館の充実度、大学寮の設備等。しかし、スミスで1年勉強した後、学生は女同士の親密な友情を育て、大学にも親近感を抱き、女子大で学ぶことの多くの利点に気が付き、意識的に女子大を共学での勉学より高く評価するようになるようだ。」

— スミスは女子大として存続するつもりですか？

「現時点ではそのつもりだ。どんな組織にも財政問題はつきまとう。スミスはちょうど財政安定のための5か年計画を導入したところだ。スミスは何よりも女子大として設立され、以来創立者の意思を継承してきた。最近プリンストン大学などのアイビーリーグで大学設立目的を見直し、その原点に戻ろうとする動きがある。スミスの使命は女子の高等教育であり、世界に貢献できる女性リーダーを育てることだ。」

#### これからのスミス

スミスは、創立の原則を守りつつも、常にそれぞれの時代の社会的潮流を敏感につかみ、独自の教育目標を掲げて、それを迅速に実践してきている。現在の数学、科学教育への取り組みとキャリア開発センターの拡充は、国内の大学生数の減少と、女子学生の共学校志向傾向の中で、学生数確保のためには質の高い教育とサービスの提供が必須の課題であることを示している。

また国内のみではなく、教育の国際化を図り、優秀な女性を海外からも集めて女性リーダーとなるように教育している。留学生の割合は10年間に2%から6%に増加している。これらの留学生は、アメリカ人学生の異文化経験を豊富にし、教育の質を高めると共に、人口減少時代の大学経営には貴重な財源でもある。国際的に各界で活躍する卒業生は、スミスへの将来の入学希望者を確保するための最高の“宣伝者”であり、“リクルーター”なのである。

アパルトヘイトに反対する学生運動に基を發して1984年に設けられた南アフリカ共和国の黒人女性に対する奨学金制度は、大学の教育理念にも合致するし、道義上からも推進すべきものであると、私は思った。それと同時に、それは国際社会でのスミス大学の名声と評価を高めるのに格好の「投資」でもあると言えよう。バーバラ・ブッシュが大統領夫人になった時、スミス大学を結婚のために中退した夫人に89年9月の入学式で名誉学位を授けて同窓会に迎え（大口の寄付者でもある）、全米の目をスミスに向けさせるなど心憎い広報、経営戦略だ。しかし、このような経営も、女性リーダー育成への強い使命感とその目標を遂行しているという誇りに支えられたものなのだろう。



1989年9月の入学式 ダン学長とバーバラ・ブッシュ大統領夫人

photo credit: David Molnar

女子大学が存続するためには、何よりも女子教育に対する強い使命感がいるのではないだろうか。その大学でしか得られない質の高いユニークな教育の提供と同時に、女子大でしか得られない教育と貴重な経験が与えられることが大切だとスミス大学の例を見て感じた。そのためには、時代を先取りする新しい女子教育の意義を理解し、使命感を持って実践する俊敏な経営者と教授陣、職員、質の高い学生、教育熱心な家族、母校と後輩姉妹の発展に忠誠心をこめて援助する同窓会員が一体となって取り組まなくてはならないということを、スミス大学取材して思った。

---

著者は現在、マサチューセッツ州のアムハースト大学アジア言語文明学科の日本語専任講師であり、五大学東アジア研究センター日本文化顧問である。小中高校での日本学習と日米文化交流の仕事にも携わっている。